様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月　 ８ 日現在

機関番号：１２２０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2013～2015
課題番号：２５８７０１０６

研究課題名（和文）小中学生のいじめ場面の行動における罪悪感と共感性に関する検討

研究課題名（英文）Study on empathy and guilt feelings of the behavior in elementary and junior high school's bullying situations

研究代表者
石川　隆行（Ishsikawa, Takayuki）

宇都宮大学・教育学部・准教授

研究者番号：５０３４２０９３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,400,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、いじめ場面の行動を加害、観衆および傍観行動と分類し、その行動を犯してしまった際における罪の気持ちである罪悪感を明らかにし、また罪悪感と他者への感情移入である共感性との関連を検討するものであった。
　小中学生を対象として質問紙調査を行った結果、小学校から中学校にかけて、子どもはいじめ行動による罪悪感を感じることが少なくなるという学年による発達的変化が示された。また、小中学生のいじめを抑制するには、豊かな共感性を育み、いじめ行動による罪悪感を高めることが重要であると示唆された。

研究成果の概要（英文）：The present study examined how children feel guilty in bulling, and the relation of empathy to guilt feelings. Guilt feelings were induced by putting perpetrators, spectators and bystanders' positions in bullying situations (blowing, speaking ill of person, estranging, and speaking ill of a person by e-mail).
The subjects who measured guilt feelings and empathy were 4th, 6th, 7th, and 9th graders. As a result, guilt feelings in bulling situations were the most intense among 4th graders, and girl students were more guilt-prone than boy students. In addition, empathy was positively correlated with guilt feelings in all bullying situations. From the results of this study, it is said that the guilt from bullying declines with grade, and empathy can be one of the important factors to diminish bullying among children.

研究分野：発達心理学

キーワード：いじめ場面　罪悪感　共感性　小学生　中学生

１．研究開始当初の背景

いじめは、被害者に身体的、心理的苦痛を与えるだけでなく、学校ひいては社会全体に悪影響をもたらす。わが国において、いじめは依然憂慮すべき今日的状況であり、いじめ防止対策の確立は、喫緊の課題となっている。

従来、いじめの研究は、いじめが顕在化してくる小学校中学年から中学生を対象とし、被害者に対する加害者の心理特性を精力的に検討してきた。しかし、いじめについては、観衆や傍観者が関与することで生じ、両者の行動によって加害者の行動が変容するという指摘がある（森田・清永、 1994)。観衆や傍観者の加害者への関わりは、いじめの抑制につながる可能性が高いため、いじめ場面において加害だけでなく、観衆や傍観行動を規定する心理特性を明らかにすることが不可欠である。

欧米において、観衆や傍観行動の心理特性については、いじめの被害者に対する罪の意識や、被害者への理解の不足が指摘され、罪悪感（guilt）や共感性（empathy）に着目した検討が詳細になされている。相手への謝罪を促す罪悪感について、石川・内山（2001、2002、 2005）は加齢に伴い減少すること、また小学生の罪悪感が学校や地域のなかで育まれることを明らかにした（石川、 2010)。一方、国内外で数多く研究されている共感性は子どもの問題行動を抑制する機能をもち（Davis、 1994)、罪悪感に影響することが報告されている（石川・内山、 2002)。しかしながら、罪悪感についての検討は近年、行われたばかりであり、小学生、中学生のいじめ場面における罪悪感と共感性の関連は解明されていない。

わが国において、いじめ場面を設定し、加害、観衆および傍観それぞれの視点から罪悪感と、それに関連する共感性を捉えることが重要であり、検討された知見はいじめ防止の教育実践に有効であると期待される。

２．研究の目的

本研究は、小中学生のいじめ場面の行動（加害、観衆および傍観）における罪悪感の特徴と、罪悪感と共感性との関連を検討するものであった。すなわち、第１点目として、いじめ場面において加害、観衆および傍観行動をしてしまった際に、小学生と中学生の罪悪感がどのように喚起されるかについて明らかにした。

また、第２点目として、いじめ行動において喚起されて罪悪感と共感性との関連について、小学生から中学生までの発達的変化の様相を分析した。本研究の分析結果は、学校現場においていじめに対する教育的対応の一助となるよう、小中学校教職員参加の研究会にて報告した。

３．研究の方法

研究は対象となる小学生、中学生に質問紙を配布して実施された。いじめ場面の行動における罪悪感質問紙においては、いじめ場面を設定するため、調査対象校となる小学校、中学校の先生方と協議を重ね、また児童、生徒の精神的負担を配慮した内容、項目数とした。設定したいじめ場面は、殴る、悪口、仲間外れおよびメールでの悪口であった。いじめをしてしまった際に、あやまりたい気持ちになるかを用いて、罪悪感を４段階評定（あやまりたい気持ちにならない～あやまりたい気持ちなる）で測定した。項目例は以下の通りである。

例　いじめ場面「殴る」

ある日、クラスのお友だちＡくんたちが、あなたと日ごろ仲良くしているお友だちＢくんをなぐっていました。

問．あなたは、Ａくんたちがとった行動について、どれくらいあやまりたい気持ちになりますか。

a．あなたは、Ａくんたちといっしょに、Ｂくんをなぐってしまいました。(加害)

b．あなたは、そのとき近くにて、Ａくんたちが Ｂくんをなぐっているのを見てみぬふりをしてしまいました。(傍観)

c．あなたは、そのとき近くにいて、Ａくんたちが Ｂくんをなぐっているのを、おもしろがってしまいました。(観衆)

また、いじめ場面の行動による罪悪感と関連を検討する共感性の測定には、児童用共感性尺度（長谷川他、 2009)、青年期用多次元共感性尺度（登張、 2003）を用いた。

４．研究成果

(1)小学生について

小学校４年生 214 名、６年生 247 名を対象として、質問紙調査を行ったところ、すべてのいじめ場面の行動による罪悪感において、小学校４年生が６年生よりも、また女子児童が男子児童よりも罪悪感を感じやすいことが明らかになった。さらに、４つのいじめ場面のうち、小学生は殴る場面において罪悪感を最も感じることが明らかにされた。

次に、いじめ場面の罪悪感と共感性の関連を相関分析により検討した。その結果、加害、傍観および観衆行動による罪悪感は、共感性を構成する視点取得(Perspective Taking)と共感的関心(Empathic Concern)との間に、有意な正の相関関係が認められた。また６年生男子において、加害、傍観および観衆行動による罪悪感はファンタジー(Fantasy)と有意な正の相関関係を示した（図１）。

これらの結果より、いじめ場面の行動から喚起される罪悪感は小学生において学年が上がるにともない減少し、また男子児童が女

子児童よりも罪悪感を経験しにくいことが示された。また、いじめ場面の行動による罪悪感と共感性が関連することが明らかになった。これは、共感的関心と視点取得が高い児童はいじめ場面の行動による罪悪感を感じやすいことを示唆している。相手の立場や気持ちを理解することがいじめの罪悪感を高めることにつながると考えられる。

さらに、男子のみ、ファンタジーがいじめ場面の行動による罪悪感に関連していた。ファンタジーは物語の登場人物や主人公になりきるという特徴を示す。これにより、男子児童はいじめ場面を自身のなかで物語場面のように位置づけ、加害、傍観および観衆行動を行うことを悪として、罪悪感を感じているのかもしれない。

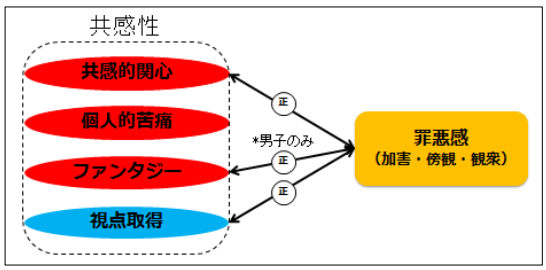

図１　いじめ場面の罪悪感と共感性の関連

(2)中学生について

中学校１年生 353 名、中学校３年生 352 名を対象として質問紙調査を行った。その結果、加害行動による罪悪感において、中学校１年生が３年生よりも、女子生徒が男子生徒よりも罪悪感を感じやすいことが明らかになった。また、いじめ場面については、殴る場面において罪悪感を最も感じることが示された。一方、傍観行動による罪悪感については、悪口場面において中学校３年生の男子生徒の罪悪感が最も低かった。また、観衆行動による罪悪感は、中学校１年生の殴る場面の罪悪感得点が最も高いことが明らかになった。

次に、いじめ場面の行動による罪悪感と共感性の関連を検討するため、相関分析を実施した。その結果、すべてのいじめ場面における罪悪感と、共感的関心と気持ちの想像との間に正の相関関係が認められた。また、すべてのいじめ場面において、男子生徒の加害行動による罪悪感は個人的苦痛と有意な正の相関関係が認められたが、女子生徒の加害、傍観および観衆行動による罪悪感は個人的苦痛と相関関係が認められなかった（図２）。

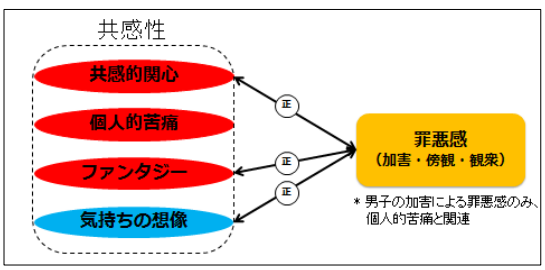

図２　いじめ場面の罪悪感と共感性の関連

これらの結果より、中学生では学年が高いといじめ場面の行動による罪悪感を感じにくく、また、男子生徒が女子生徒よりも罪悪感を経験しにくいことが示された。さらに、罪悪感と共感性の関連を検討したところ、両者に関連が認められ、共感性が高い生徒はいじめ場面の行動による罪悪感を感じやすいことが明らかになった。

一方、加害行動による罪悪感において、男子生徒のみ個人的苦痛との関連が認められた。個人的苦痛は他者の苦しみに対する自分自身の苦痛や不快感を示す。したがって、いじめ場面において他者への苦痛を経験しやすい男性生徒は、とくに加害行動において罪悪感を強く感じると考えられるといえよう。

(3)小学生と中学生を合わせた総合的検討

小学校から中学生におけるいじめ場面の行動による罪悪感の発達的変化を検討するため、(1)、(2)の調査で対象とした小学校４年生、６年生、中学校１年生および３年生を合わせて分析を行った。その結果、すべてのいじめ場面の行動による罪悪感において、小学校４年生が最も高いことが明らかになった。また、性別による差異については、校種に関わらず、女子の罪悪感が男子の罪悪感よりも高いことが示された。これにより、小学校から中学校にかけて、子どもはいじめ行動による罪悪感を感じることが少なくなるという学年による発達的変化が示された。

一方、罪悪感と共感性の関連については、小学生、中学生において共通して、いじめ場面の行動による罪悪感と共感的関心、視点取得との関連が認められた。また、ファンタジーについては、小学校では男子のみ、中学校では男女ともに罪悪感との関連が明らかになった。これは、小中学生のいじめを抑制するには、豊かな共感性を育むことによって、いじめ行動による罪悪感を高めることが重要であることを示唆している。さらに、共感性を構成するファンタジーがいじめの罪悪感と関連することから、従来学校現場で実施されているいじめに関する物語や映像資料等を用いて、被害者や加害者の気持ちを理解させることが児童、生徒にとって、いじめを起こさないために有効であると推測される。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 1 件）

①近藤成一、石川隆行、小学生のいじめ場面における被害者援助行動と共感性の関連、道徳性発達研究、査読有、Vol. 9、No. 1、2015、pp.67-75

〔学会発表〕（計 4 件）

①石川隆行、稲垣実果、青年期における罪悪感について－自己愛的甘えと心理的負債感からの検討－、日本発達心理学会第 25 回大会、平成 26 年 3 月 22 日、京都大学

②稲垣実果、石川隆行、青年期における自己愛的甘えと心理的負債感の関連について、日本発達心理学会第 25 回大会、平成 26 年 3 月 22 日、京都大学
③石川隆行、小学生のいじめ場面の行動における罪悪感と共感性の関連、日本教育心理学会第 56 回総会、平成 26 年 11 月 8 日、神戸国際会議場
④石川隆行、中学生のいじめ場面の行動における罪悪感と共感性の関連、日本心理学会第 79 回大会、平成 27 年 9 月 22 日、名古屋国際会議場

６．研究組織

(1)研究代表者
石川　隆行（TAKAYUKI, Ishikawa）
宇都宮大学・教育学部・准教授
研究者番号：50342093